

泉州ではたらくひとたち

Sensyu Working Style

インタビュー／キットプレス編集長 小田原 大輔さん



「南大阪のおいしいお店3」
定価 980円(税込)

詳しくはWEBで!



ご自分の性格を「ネガティブ」だという小田原大輔さん。それはなぜ? 『泉州のおいしいお店』シリーズの九冊目を発行したばかりの小田原さんにお仕事や子どものごころのお話についてお聞きしました。

—キットプレスとはどんな会社ですか?

二〇〇二年春、地元「泉州」の情報が満載のフリーペーパーを発行したことを発端に、現在はインターネットで「南大阪を楽しむ地域情報サイト・キットプレス」を中心事業としています。また出版部門として『泉州のおいしいお店』シリーズを発行。現在は、掲載店の範囲を南河内まで広げた『南大阪のおいしいお店』としてシリーズを統一して二年に一度のペースで発行しています。二〇一二年十一月二十九日から発売開始の『南大阪のおいしいお店3』で通算九冊目となります。

—どんな子ども時代をすごしましたか?

六歳のころ、両親が離婚したのであまりいい思い出はありませんが、小学六年生まで岸和田の春木旭町に住んでいました。北公園のたこの滑り台でも遊んでいましたよ。怖かったけどやさしかった担任の男の先生のことや心に残っています。遠足の時、先生のお母さんが作ったお弁当を持ってきてくれました。とてもうれしかったのを覚えています。

—「大人になったな」と思ったのはどんな時?

十八歳のとき、一緒に住んでいた父親と大喧嘩をして家を飛び出しました。それからはアルバイトしながら一人で生活していました。子どもの頃に傷ついた記憶はなかなか消えてくれませんが、結婚して自分にも子どもが出来て、少し親の気持ちが分かったかな。

—自信を持てたのはどんな時ですか?

自信を持てたと確信したことは一度もないです(笑)。でも見ず知らずの人が『泉州のおいしいお店』のことを知っていてくれたりすると、継続の大切さを感じます。実は、この会社を始める前に二十社くらい転職しました。社長と喧嘩してやめたこともありました。長くても三年、三日でやめた会社も(笑)。でもそれだけ経験値を上げることができ今の仕事につながっています。

—「人生には偶然なんて無く、全ては必然で無駄なものなんて何もない」というのが僕の特論なんです。

親になって初めて親の気持ちがかかるのと同じで、社長になって初めて社長の気持ちがわかりました。あえていうなら、今自分が十一年続けてこれたことが「自信」につながってるのかもしれない。

—小田原さんにとって仕事とは何ですか?

「自分の存在証明(レゾナードール)」だと思います。人はそれぞれ「ものさし」を持っていきます。深く生きればそれだけ「ものさし」は長くて視野が広がる。でも自分のものさしだけでは、はかれない仕事もある。そんなときはコラボレーションして戦っていける仲間と一緒にがんばっていききたいと思います。

子どもの頃のつらい体験が、力となりバネとなって今の自分がある。それが小田原さんの原動力となっていました。「ネガティブ」を「ポジティブ」に変えて仕事につなげていく。人生の知恵を教えてくださいました。